校友時報

昭和46年10月8日
編集人兼発行所
秋田県能代市追分町4番26号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所　大勝堂印刷所

十里強歩

年中行事の内の一つ　十里強歩は今年は女子の参加が認められ、コースも一部変更されるとともに逆回りとなり　男子は一周　女子はコースの中間点である森岳関門までで行なわれた。しかし　今年は昨年には見られなかった問題が続出するという異常事態が生じ、今後の十里強歩の運営にも問題として取り上げられそうである。

女子の参加、認められる

コースも一部変更される

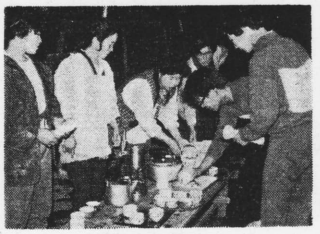
九月一日の午前0時から恒例の四十余キロを走破し、且つ、精神の鍛錬を目的とする十里強歩が行なわれた。あいにく、曇り空で星一つ見えなかったが、総勢八百九十三人（内女子四十八人）が三年、二年、一年、女子の順で元気よく校門を出発した。

今年は、昨年、悪路で評判が悪かった赤坂―大内田間を廃止し、東能代―桧山―赤坂コースに切り換えられ、全体のコースも昨年の逆回り（右回り）になった。それ迄は女子が参加を認められず、女子の参加がコースの中間点である森岳関門までということで認められた。

新聞部はその森岳関門で午前三時頃から約四十分間インタビューした。その結果、女子に初参加の感想を聞いてみたところ、「楽しい！」「面白かった。」「このまま学校まで行きたい。」などと終始、笑顔笑い声が止まぬ声が圧倒的に多く、反対に「疲れた」という事は聞かれなかった。中には、途中で男子を抜いてくるのが面白かったという声も聞かれた。ちなみに女子で最も速かったこの山崎さんが森岳関門にゴールしたころは三時半前、この頃まだ男子の半数弱は未到着とのこと。距離の関係もあるが女子のハッスルぶりには驚かされた。

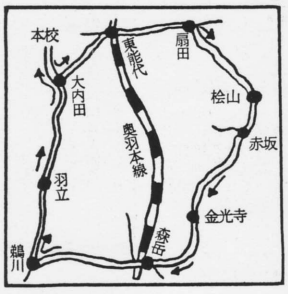
新たに男子にマイクを向けてみたところ、「疲れた。」「まだまだこれから。」とさまざまな声が聞かれ、中には「オナゴに抜かれてしまったデノ　ナサケネナノ」との嘆きの声も聞かれた。

コース変更のことについては、まとめてみると、道路は昨年よりよい。だから歩きやすい。しかし、不満の声が多かったのが反映して、今年は女子の参加がコースの中間点である森岳関門までということで認められた。


扇田付近にて

そのため、長くなったのではないか。などである。まあまあ好評を得た、という感じであった。

また、一年生の、初めて参加した感想としては、「面白い。」「楽しい。」という声も多かったが反対に、「疲れた。」という声も少なくはなかった。いずれに座っておられた校長先生に聞きしたところ、「みんなよく頑張っている。」とほほえみながら感想を述べてくださった。



十里強歩のコース
本校→大内田→東能代→扇田→桧山→金光寺→森岳→鵜川→羽立→大内田→本校
（太字は関門を示す）

生徒会正副会長選　告示される

生徒会正副会長の任期も十月一日で切れ、新しい生徒会正副会長選挙は九月二十日に告示された。今年も、立候補者がでるかいささか心配そうな気配があったが、今回は会長候補に一Aの石塚君、副会長候補に同じく一Aの松橋君が立候補した。

また、同じく行なわれる応援団正副団長改選にも団長候補として、生徒会副会長にも立候補した松橋君が、副副団長候補にはこれもまた一Aの福田君が立候補した。

立候補は四日の三時で締め切られ、対立候補はなく今年もまた、信任投票という形となった。また候補者会員が一Aということで話題を呼んでいた。

しかし、五日に行なわれるはずだった肝心の投票は、能高祭の準備や講演会があったりして、五日には行なわれなかった。昨年も選挙管理委員の怠慢が問題になり、異常選挙という形をとってしまったが、今年も昨年の異常選挙とまではいかなくても批判の声を呼びそうである。

能高祭始まる

能高祭はいよいよきょうから九日・十日と三日間催される。

執行部では、一学期中ごろから各ホームルーム、各文化クラブなどでは二学期に入り間もなく活動を開始した。

今年も去年と同様、全校生徒が何らかの形で参加することになっている。それで、各ホームルームではルームデコ、演芸、諸準備などのうちどれかをやらなければならぬことになっている。ところがこれにより個人デコが最初は認められることになっていたのが、後で認めないことになり、結局、条件つきで認められた。これは、ホームルームクラブデコを重視している結果である。それでもいがもうし個人デコについてはしっかりした見解を表してもらいたい。もっと早くいそのことを明確にしておくべきではなかっただろうか。

ここに、三週間は準備のため夜遅くまで騒がしかったのがなんとなくおさまり、三年生にとっては高校最後の、一年生にとっては高校最初の文化祭である。すでに、準備は大部分が済み、あとは開始を待つばかりだ。そこで生徒会長に一言話してもらった。

生徒会長の話

今年の能高祭は例年と同様で、あまり大きな変化はない。ただ、特徴として、いつものような喧ふんい気にならないように押えたことである。

企画については、騒がしくなるようなもの、例えばフォークソングなどはなるべく体育館で行なわせ、個々の場で行なわないようにし、どうしても体育館以外でやる人たちには、迷惑にならないところでやってもらうことにした。

また、レコードコンサートについても、これも一つにした。行なうのは音楽同好会（旧放送部）と個人デコの人たちである。これも視聴覚室に限定した。

次に、今回最大の問題となった予算については、当初、去年を例とし、おおよそ二十三万円と計画を立てたが、後になり催し物の数が去年の二倍ほどに増し、予算請求額もおおよそ十万円となった。そのための差を縮めるため、各デコ等に対し、請求した内容で賄わずに代用できるものは代用し、こちらで準備できるものは準備して削らせた。また、プログラムも初め三十円であったものを四十円に値上げしたりなどして切り抜けるつもりである。

なにはともあれ成功を祈る。（E）

〝おばさん、ごくろうさん〟（森岳関門にて）

接待してくださったおばさんたちも「みんな元気だね。」と感心された表情であった。それから、飲食物についてはにみな圧倒的に女子が人気を呼び、次におにぎり、水、番茶の順のようだった。（森岳関門だけの調べ）

十里強歩の意義とは？

昨年から、生徒の精神力向上などを目的として復活した十里強歩は、前回は会員が初めてだったせいか不安は隠しきれず、いたるところに形となって現われたが、今回は一年生を除いてはそんなに不安は感じられなく、前回より落伍者は多かったものの（七人）前回以上に盛り上がり見られた。

岡本先生は三溝十三号の中で十里強歩の感動として、千人近い生徒のすべてが「先生」に声を掛けたり、握手したり、また親子の断絶といわれる中で自分の子の影を見つけ、気をもみながら待っている父親の姿―。このような「非日常性」ということを強調しておられた。

我々ほとんどの生徒は毎日平凡なくり返しの生活を送っていて、「非日常性」をとん時より求められないのが現実である。その現実にうるおいを与え、且つ高校生活のよき一ページとなりうるそれ―十里強歩―への我々の期待は大きい。事実、四十余キロを完走したあの満足感は、二三日の足の痛さにかえることはできない貴重な体験である。それほど充実した行事だから。

これからも十里強歩は続くだろう。我々は、それを根性とか、忍耐を養う、ということもで「非日常性」の意義ある場として歓迎したいのである。最後に、この十里強歩の企画や世話のため苦労なさった先生、ならびに父兄各位に心から感謝の気持ちをあらわしたい。（H）

問題点を探る

今回の十里強歩も何の事故もなく無事に終った。

去年はゆるされなかった女子の参加も認められ一層充実さが見られた。全体的におもしろい、楽しい、疲れたけれどもおもしろいと言うことばがたいへん多く聞かれた。特に、今年初めて参加した女子の一年生にそのことばが多かった。

それに今年は警備にあたっている警察の方々や父兄の方々に対する態度が学生らしくて気持ちがよいと言う声が多く、これらの面でも今年は成功した十里強歩と言えるであろう。

しかし、このように一見おもしろく無事に終ったかのように見られる十里強歩も、ある一部の一、二年生の人たちの行為によって、今回の十里強歩に汚点を残してしまった。十里強歩と言うものを後味の悪いものにしてしまったことを認めなければならない。

このことは知らない人が多いはずである。ほとんどの人たちが、一生懸命であった時のことであるから。しかし、悪いことは、決して他人にみつからないことはない。

ある一年生は「先輩たちが強歩中に法を犯すようなことを平気で行なっているのにびっくりした。これが高校というものかなあと思った。」と言っていた。このことは大いに考えさせられる。

一年生の模範となるべき先輩がわざわざこのような行為をして、信用をなくすようなことは大いに反省しなければならないことである。来年はこのようなことがけっしてないようにしたいものである。（I）

三点

▼成田安港　建設、過激派学生のゲリラ行動、三人の犠牲者、これにより学生等はますます社会的に見離されていったようである。やはり全く人道主義の前ではなんの意味もなさないのだろうか、単に批判することは簡単なことだ。我々を含む今の現代社会がそのようなものをならべている事実を無視してはならない。▼制帽自粛、こんな声もうすっかり影をひそめたという感じが校内にしみこんでしまったようだ。是非はいろいろと思うが、それにしてもあまりにもあっけなく感じられてならない。自由化を叫んだ諸氏の真顔は今どんなであろうか。我々高校生の存在とはいったいなんであろうか。▼人間回復。青空をふと見上げた時があるだろうか、赤トンボを見つけて追い駆けた時があるだろうか、銭湯の帰り道、夜空の北斗七星をさがした時があるだろうか。読者諸君、これはキザだろうか。「秋はだれでも詩人する。」いいじゃないか、秋の夜長を勉強に費すのもいいがたまには勉強の手をやすめて窓を開け放し虫の声にも耳を傾けたまえ。懐古主義的だと言われそうだが、いいじゃないか。あなたが日本人ならば秋の風流を楽しもうではないか……人間回復。▼つけ加えて、読書といいたいが、意外や意外（？）みんなよく読んでいるようだ。専門書を ちらつかせ、かなり進んでいる者、果ては内職にマンガを読んでいる者―。先生方『最近の学生は……』などと言ってくださるな。新潮、角川、単行本愛好者は意外に多いのである。ここで読書論を試るつもりはないが、本なんて読みたいものだけ読めばはいいのであって、あたかも教養があるような顔をして、ペラペラと筋だけおうような ことはしたくないものだ。ずばり、「あなたは何のために本を読んでいますか。」こんなことを考えてもいい時期じゃないだろうか。（S）